

とある科学の超電磁砲外伝 とある科学の流星電子

Ucchi9

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

御坂美琴に復讐を果たしたい 青星 水無

それを支援する謎の男

そして水無と出会い

時に協力し

時に争う

様々な人たち

そんな人たちの物語が

今始まる

目次

前章 「蒼き流星」	1
第1章前編 「ジャツジメント」	4
第1章中編 「恩人」	8
第1章後編 「復讐」	12
前章＋第1章総集編＋次回予告？	19
第二章前編 「従姉妹」	37
第二章中編上 「偽りの親」	43
第二章中編下 「電荷粒子」	48
第二章後編 「復讐」	62
第三章前編 「真実」	71

前章 「蒼き流星」

暗き空の下に無数の光が散りばめられている。

ここは学園都市というらしい。

ただここに来て3日も経ってないのでよくわかっていない。

「…明るい」

彼女はそう思いつつ昏い場所を探す。

前章 「蒼き流星」

小さな公園の片隅で眠る彼女の姿があった。

その行動は周りから見ればなんらかの事情があるとしか見えな

しかし彼女の装いはそうは思わせないほどのものだった。

黒いシャツを着、そこに水色のネクタイとパーカーを巻き、

髪はサラツとしていてどんな人でも憧れるような白髪に先端に赤
みがかかっている。

髪型は下向きのツインテール。

そしてなんととっても嚴重そうなキャリアケースが二つ。いかに
も格式高い家のお嬢様だ。

不意にスマホが鳴る。

彼女は寝ぼける様子もなく素早く取りメールを確認する

「D8:i10 p17:32 m24」

それを見た彼女は荷物をまとめる。

その目は希望と殺意が入り混じった目をしていた。

そしてある建物に向かう。

その建物にはこう書いてあった。

「第4学区特殊粒子形成能力者研究所」

中に入ると彼女はケースのフタを開けて中のものを取り出し始め
た。

中には重そうなアサルトライフル、

そして拳銃が入っていた。

彼女は手早くそれを装備し、建物の奥に進む。

やがて大きな部屋に着く。

4方向に道があるだけの
ただ大きいけど部屋。

その真ん中に立つや、男の声が聞こえてきた

「やあ 準備はできてるようだね。

ただ、そんな装備じゃ死んでしまうよ。

君はまだ頭金も支払っていないからね」

彼女 「……………」

「はは では、第1実験を開始する。」

そう言い放った瞬間4方から武装ロボが出てくる。

全部で8体、それが彼女を取り囲み銃口を向ける。

そんな状態でも彼女は平然としている。

ロボットは攻撃を始める。

彼女は走って避けアサルトライフルを手に取り反撃を始める。

彼女が使っているのは m27 i a r 、

5.56mm弾ではきずひとつつけられない。

ロボットが一斉に射撃する。

すると彼女の体から青い光が出たと思うと

横に高速移動し出した。

悠々と攻撃をかわし1体に向けて集中的に撃ち出す。

今度は銃口から青い光が出ている。

それはまるで「流星」のようだった。

ロボットはハリボテかのように

貫通し崩れ去る。

そのうちに他のロボットが周りを囲い撃つ。

するとロボットの弾が逸らされる

まるで周りにバリアがあるかのように。

彼女はとつさに体を小さくし光出す。

すると周りに爆風が起き外壁もろともロボットを吹き飛ばす。

—————

周りには建物の破片そしてロボットの残骸

その上に彼女の姿があった。

またあの男の声が聞こえる

「やあ、余裕だったようだね。

このぐらいならlevel3ぐらいでも苦戦するのにそれをこんな短時間に

はは、さすが噂通りのようだね。

「蒼き流星」

青星 水無」

セイショウ ミナ

「さあ頭金は払ってくれた

君の願いを言つてご覧。」

「決まっている

殺させろ

あいつを

レールガン

御坂美琴を

殺させろ」

第1章前編 「ジャツジメント」

彼女の手には資料が握られていた。

もちろん彼女の戦利品、

昨晚の実験で得たものである。

彼女は隅から隅まで目を通す。

「常盤台中学 二年……」

「白井黒子と同室……」

「…… 白井黒子って誰だ？」

その資料には御坂美琴の個人情報

といってもほんの一部にで個人情報と言えるかも怪しいものだった。

「…… こんなの情報かよ」

「ん…… これは」

第1章前編 「ジャツジメント」

最後のページには御坂美琴の友人関係が書かれていた。

それに目を通そうとすると

「あの、すみません」

不意に頭の上から声がした。

資料を見られないようにしつつ見上げる、

そこには頭に花をつけた女子中学生がいた。

腕にはジャツジメントの腕章がついている

「はい、なんででしょうか？」

無論ここに入るための正式な手続きなんて行ってない。

ここでトラブルを起こして身元がばれてしまつては復讐など不可能。

ましてやジャツジメント相手にトラブルなんでもつての他だ。

なので出来るだけ好印象を受けるように丁寧に戻す。

「今さつき連続強盗犯がここら辺を逃走していたらしいのです、赤い帽子を被った男なのですが、何か知っていたら教えて貰いたいのですが。」

無論、さつきまで資料しか見てない。

しかし「知りません」で返すのは
良くない。

それにこの都市について何も知らない。

一緒に探せば色々教えてもらえるだろう。

「特徴的な赤い帽子をかぶった男なら見ました。
ずっと前ですが」

女子中学生 「そうですね、できれば案内してもらえませんか？」
「分かりました。」

そう言いつつ彼女は立ち上がる。

そして自分ならどう動くか考えつつ
適当に案内し出した。

そして30分間探すフリをしつついろんなことを聞いた。

その女子中学生は初春 飾利と言うらしい。

そしてここらへんの裏道、近道、店などを
教えてもらった。

肝心の御坂美琴については特にこれといったことは聞けなかった。
ただこれでもかなりの収穫だった。

そろそろ潮時かと思いつつ
あたりを見回すと

特徴的な赤い帽子の男。

一瞬だけ見つけてしまった。

人混みの中そそくさと裏道に入って
いくのを。

ここで伝えると面倒なことになる
ここはスルーして……

初春さんは真面目に探してる。

その目は正義で溢れていた。

…仕方ない
情報料代わりだ

「すみません。」

今その男が裏道に入っていくのを見ました。」

初春 「本当ですか!!」

ありがとうございます。」

「あなたはここに…」

「いえ、ついていきます」

そっちの方が怖いフリして逃げ出せるからだ。

初春 「分かりました。でも危なくなったら逃げるんですよ!!」

「分かりました」

そう言いつつ裏道に入っていく

裏道に入って3分ぐらい男が仲間と金を分けているのを見つけた。

初春、腕章を男たちに見せつける

「ジャツジメントです」

「窃盗の容疑で拘束させて貰います」

男たち、初春達を睨みつける

「ああん、誰に向かっていいってんだ!!」

初春、ビビって震えている

「なあにビビってんだ。」

まあでもジャツジメント捕まえておけば

交渉に使えるかもな。」

「お前ら捕まえろ。」

そう叫んだ瞬間、周りから男たちが出てきて

一斉に襲い掛かった。

水無はスイツとこうげきを避けたが、

初春はもろに頭に喰らい壁に叩きつけられてしまった。

「初春さん!!」

そう叫んだが返事がない

どうやら気絶してしまったらしい

自分だけなら逃げれるが、
いや、能力を使えば……
だめだバンクに載ってない能力を使ったら
確実に身元が調べられる。
そうしたら……でも
そうしないと初春さんが……。

まあいいか。

もうこの人の前に現れることはない
情報料分は支払った。

サヨナラだ

初春さん。

そう思い逃げ出そうとした時

「ジャツジメントですよ!!」

「今日の黒子は凄く切れてますの!!」

上を見ると建物の上に人影が見えた。

……… 黒子

その名前が水無の目に復讐を思い出させた
レールガン

御坂美琴の知り合い………!

第1章中編 「恩人」

脚を引きずりながら水無は

例の建物に向かう。

右脚は赤い液体が流れていた。

痛みで顔が歪む。

ただそんな中に笑みも憎しみも含んでいた。

そしてその手には白井黒子の手帳と

白井黒子の寮室の鍵

つまり御坂美琴の寮室の鍵が握られていた。

第1章中編「恩人」

あの時、

白井黒子が駆けつけた時、

水無は突然太陽が見えて目を逸らした。

その瞬間目の前で着地音がした。

チカチカする目で前を見るとそこには

黒子が立っていた。

水無は驚いた白井がもといた場所からここまで3階ぐらいの高さがある。

この人の能力はなんだ？

と思いつつ

白井を見つめる。

白井は男達に近づくと、

1人の男が白井に襲いかかる

その男の攻撃を躲し白井は顔面に強烈なキックを入れる。

男はグワんと後ろに倒れた。

その男の顔は真っ赤になっており無残としか言いようがなかった。

その瞬間他の男も襲い掛かってきた。

その瞬間白井は消えた

いや、正確には男達の上空にレポートしたのだ。

その手には何かを掴んでいた。

テレポートか。こんな奴が同室か
厄介だな。

水無はそう思いつつ見つめていると
不意に目の前にでかい青い物体が現れた。
水無は落ちる寸前でそれをキャッチした。
見るとそれは初春だった。

「初春を連れて逃げてくださいませ」

白井はそう言いつつ奥で戦っている。

勘弁してくれ

そう思いつつ表に出ようとする。

「逃すかよ。」

一人の男がナイフを投げてきた。

水無は避けようとする。

しかし初春を抱えてることなど

忘れていた。

水無はバランスを崩してしまった。

「くっ 痛あ」

水無は転んだ。

右脚が痛む

触ってみるとそこには硬いものが当たる。

手は赤く染まる。

おそるおそる右脚を見てみると

ふくらはぎにナイフが刺さっている。

そこから血が溢れていた。

大丈夫まだ動…… 痛!!

水無は立とうとするが痛みで上手く立てない
男が水無を蹴り倒し初春を奪い取る。

「へへ、あばよ。」

そう言いつつ裏道に消えてった。

水無はこれを好都合と考えた。

こうなればアンチスキルはまず初春の搜索に動くだろう。
そうなれば自分の身元がバレる前に御坂御坂
に接触できる。

まあ、白井からはパンチ一発は貰うことになるかも。
仕方ないか。

そんなこと考えつつ倒れていると

白井黒子が戻ってきた。

「……初春は」

「………初春はどうしてのですかと

聞いているのですよ!!」

「……連れていかれた。」

「……」

あつおこっつっているな

まあ当然か。

水無は覚悟を決めて目をつぶった。

不意に身体が浮いた。

何かと思って、

目を開けると白井が水無を移動させていた。

「なぜ、怒らない

この状況なら恨んでもおかしくない」

水無は言う。

すると白井は、

「なぜ、怒るのですか?」

と平然に答えた。

「あなたに任せたくしが

いけなかったのですし。」

「それに、あなたにそんな怪我おわせてしまったじゃないですか。」

そういうと水無の脚を石の上に置き

処置を始める。

「はやく初春さんを探したらどうです

今ならまだそんな遠くには行つて無いと思ひますよ。」

「まず一般市民の安全が第一ですの。」

それに初春は覚悟はできてると思ひますよ。」

そう言いながら処置を終わらせた白井は

「しばらくここで待つててくださいまし。」と残して飛んだ。

建物に戻つた水無はナイフを抜く。

さっきの処置のおかげかあまり出血は増大しなかつた。

キャリーケースから処置キットを出し

包帯を巻く。

そんな中あの男の声が聞こえた。

「やあ 元気そうで何よりだ。」

しかし君がlevel10に傷を負わされるとは

僕の目は間違つていたのかね。

それにしても君も酷いものだ。

助けて貰つた人から持ち物を盗むとは。」

水無、「……………」

「今回も無視か。」

まあいい今日も実験、やってもらおうよ。」

今日も実験が始まる。

ただいつもと違うのは

水無が笑つていたことだつた

第1章後編 「復讐」

ウーーン

今日も疲れた。

そう言いつつ寮室に入ろうとする。

ただ鍵がかかってない

あれ、今日は黒子はジャツジメントだし

掛け忘れたのかな？

そう思いつつ中に入る

そこには右脚に包帯を巻いた

女性がいた

その女性は

やあ、はじめまして

レールガン

と言った

第1章後編「復讐」

御坂、「あなたは誰なの？

てっつかここにどうやって

入ってきたのよ。」

そう言われるや否や黒子の手帳を

見せつける。

「…………… あんた、黒子に…………… 何したのよ!!」

御坂は周りに電撃を散らす。

余程怒っているようだ

部屋のあちこちが焦げてきている。

「安心して、白井さんには何もしてない。

なんなら電話でもしてみたら。」

「そんなわけ…………… く。」

自分の身より相手の身らしい。

携帯を取り出し、電話をかける。

…………… プルルルル

すぐに黒子は出た。

「もしもし、お姉さま」

「黒子!!良かった無事で。」
すると黒子

「………… お姉さま、

やっぱりお知りなのですね。」

「? なんのこと?」

「初春の件ですよ…………」

「初春さんがどうしたの?」

「………… 誘拐されました。」

二人の間に沈黙が走る。

「………… どうして」

御坂が掠れた声で聞く。

「パトロール中に強盗犯に連れ去られたとしか…………」

「そしてそこにいた黒と水色の服を着た

女性も消息不明です。」

御坂の顔が陰しくなる。

「あとお姉さま申し訳ありません

寮の鍵を無くしました。」

その瞬間、御坂は水無を睨む。

「あんななんか知ってるでしょう。」

話しなさい!!」

水無は「その前にスピーカーモードに
してくれない。」

白井さんにお礼言いたいから。」

御坂は睨みつつスピーカーモードに切り替える。

「聞こえています。白井さん

昨日はお世話になりました。」

「その声、昨日の。」

「初春さん、まだ見つかって無いようですね

大丈夫です。私はあの男のたちに誘拐しろとは言ってません。」

「ただ、私が巻き込んでしまった感はあります

申し訳ありません。

そしてお気の毒に、御坂さんとこれが最後の会話になるとは、

さあ、最後に別れの挨拶を

したらどうです？」

白井、「えっどうことですかの

お姉さまに何かしたらゆる

パン

寮内に低い銃声音が響く。

水無が御坂の携帯を拳銃で撃ち抜いた

御坂の携帯は粉々に吹き飛ぶ。

水無、今度は拳銃を御坂に向ける。

「さあ、今度はお前の番だ。」

「死ね!!!」

水無はトリガーを引く、

御坂とつさに能力で横に避け。

電撃を水無に向け、放つ。

水無、避けるそぶりも見せず

そのまま受ける……

その電撃はあと一步のところまで横に逸らされた。

その周りには青く光る粒子が散っていた。

水無は連続して拳銃を撃つ。

御坂は左右に避け水無に接近する。

「電撃がダメなら素手よ」

そう言いつつ左ストレートを打つ。

「……無駄だよ」

水無はそう呟く。

御坂の左手もまたあと一步のところまで止まる。

その手の先には青い光が輝いていた。

水無はその手を掴むとそのまま壁に叩きつけた。

ドン

鈍い音が響く。

御坂は数回咳をし水無を見る。

その時、水無の身体全体が光っていた。

御坂とつさに電磁バリアを展開し窓から外に逃げる。

その瞬間、光は部屋全体に広がり

壁、床、天井が粉々に吹き飛んだ。

「うーま

またこれ買おう」

片手にエクレアを持ち常盤台中学の近くを歩く一人の女子中学生がいた。

制服は中学生だがその身長と体格からとても

中学生には見えない。

「あーん」最後の一口を食べようとした

瞬間、

ドゴーン

爆発音がしたと思った瞬間

彼女の身体は宙に浮き吹き飛ばされてしまった。

「うぐぐ」

「なんだったんだいまの」

彼女は運良くグリーンフェンスに突っ込んだらしい

傷は擦り傷だけだ。

だが、様々な破片が散乱し

周りには煙が立ち込めていてよく見えない。

しかしそんな中、電気を帯び、ところどころ焦げた制服を着る常盤台生が見えた。

彼女は走って近づきつつ

「御坂さん!!!」

そう彼女は叫んだ、その瞬間

常盤台生は振り返り

「佐天さん、来ちゃダメ!!!」

そう言い終わった瞬間

常盤台生は吹き飛ばされる。

「何よそ見してる」

煙の奥から黒いシャツを着た女性が
現れた。

「……なに、あの人」

佐天はそう思うしか出来なかった。

手元に硬い物があるのに気がつくまでは

御坂は体勢を立て直し地面に着地する。

「あんななんの目的で私を殺そうとしてるのよ。」

御坂は聞くと

「復讐だよ」

と声が返ってくる。

「復讐？ 私あんに恨まれるようなことした

思い出なんか無いんだけど？」

そう言うと、

「ああ、そうだろうねお前は

そうは感じてないだろうね。

むしろ正義だと感じている。」

「は、何よ、そんなこと思った事なんてn」

「絶対能力進化計画」

御坂は黙る

「あんだ…なぜ…それを」

「ウチの両親がその関連会社にいたと言ったら」

「勿論、あんたが破壊した施設の1つだったとすれば」

二人の間に沈黙が走る
そして

「あんたの親はクローンなんて
実験動物としか考えて無かったんだよ。
だからそんな研究に参加した
その実験を潰されて」

御坂の左脚が大きく後ろに飛ばされる。

「いっ」

ターン

小銃の銃声がした

御坂の左脚が赤く染まる

御坂は後ろに下がり

コインを構える。

「あんだあんなくそな研究のために
復讐するの

そんなの間違ってる。

あの子たちの思いを

思い知れ!!!」

そう言い放ちレールガンを撃つ。
パリン

何かが割れる音がする

そこには砕け散って舞っている水無のバリアと
水色のパーカーがあった

やった

御坂はそう思った

そう思えた

目に水無が映るまでは

御坂はそのまま地面にたたきつけられる

その衝撃で地面に亀裂が入る。

御坂は動けない

その上に水無がいる。

水無は拳銃を向ける。

「もういいよ」

「死ね」

ターン

銃声が鳴り響く

「なんで、だよ」

御坂は目を開ける。

そこには脚を抱える。

水無の姿があった

とつさに電撃を放つ。

それは水無の体に

直撃し水無を気絶させた。

「何があったんだ」

御坂はそう思い身体を起こすと

そこには

拳銃を構える佐天さんの姿があった。

前章十第1章総集編十次回予告？

暗き空の下に無数の光が散りばめられている。

ここは学園都市というらしい。

ただここに来て3日も経ってないのでよくわかっていない。

「…明るい」

彼女はそう思いつつ昏い場所を探す。

小さな公園の片隅で眠る彼女の姿があった。

その行動は周りから見ればなんらかの事情があるとしか見えな

しかし彼女の装いはそうは思わせないほどのものだった。

黒いシャツを着、そこに水色のネクタイとパーカーを巻き、

髪はサラツとしていてどんな人でも憧れるような白髪に先端に赤

みがかかっている。

髪型は下向きのツインテール。

そしてなんととっても嚴重そうなキャリアケースが二つ。いかに

も格式高い家のお嬢様だ。

不意にスマホが鳴る。

彼女は寝ぼける様子もなく素早く取りメールを確認する

「D8:i10 p17:32 m24」

それを見た彼女は荷物をまとめる。

その目は希望と殺意が入り混じった目をしていた。

そしてある建物に向かう。

その建物にはこう書いてあった。

「第4学区特殊粒子形成能力者研究所」

中に入ると彼女はケースのフタを開けて中のものを取り出し始めた。

中には重そうなアサルトライフル、

そして拳銃が入っていた。

彼女は手早くそれを装備し、建物の奥に進む。

やがて大きな部屋に着く。

4方向に道があるだけの
ただ大きいけど部屋。

その真ん中に立つや、男の声が聞こえてきた

「やあ 準備はできてるようだね。

ただ、そんな装備じゃ死んでしまうよ。

君はまだ頭金も支払っていないからね」

彼女 「……………」

「はは では、第1実験を開始する。」

そう言い放った瞬間4方から武装ロボが出てくる。

全部で8体、それが彼女を取り囲み銃口を向ける。

そんな状態でも彼女は平然としている。

ロボットは攻撃を始める。

彼女は走って避けアサルトライフルを手に取り反撃を始める。

彼女が使っているのは m27 i a r 、

5.56mm弾ではきずひとつつけられない。

ロボットが一斉に射撃する。

すると彼女の体から青い光が出たと思うと

横に高速移動し出した。

悠々と攻撃をかわし1体に向けて集中的に撃ち出す。

今度は銃口から青い光が出ている。

それはまるで「流星」のようだった。

ロボットはハリボテかのように

貫通し崩れ去る。

そのうちに他のロボットが周りを囲い撃つ。

するとロボットの弾が逸らされる

まるで周りにバリアがあるかのように。

彼女はとつさに体を小さくし光出す。

すると周りに爆風が起き外壁もろともロボットを吹き飛ばす。

—————

周りには建物の破片そしてロボットの残骸

その上に彼女の姿があった。

またあの男の声が聞こえる

「やあ、余裕だったようだね。

このぐらいならlevel3ぐらいでも苦戦するのにそれをこんな短時間に

はは、さすが噂通りのようだね。

「蒼き流星」

青星 水無

セイショウ ミナ

「さあ頭金は払ってくれた

君の願いを言っでご覧。」

「決まっている

殺させる

あいつを

レールガン

御坂美琴を

殺させる」

「はは、じゃああと9回実験付き合っ

てもらうよ。」

彼女は聞くや、

マガジンを交換し

構え直した。

小さな公園のベンチで

座る1人の女性がいた。

彼女の手には資料が握られていた。

もちろん彼女の戦利品、

昨晚の実験で得たものである。

彼女は隅から隅まで目を通す。

「常盤台中学 二年...」

「白井黒子と同室...」

「…… 白井黒子って誰だ？」

その資料には御坂美琴の個人情報
といつてもほんの一部にで個人情報と言えるかも怪しいものだった。

「…… こんなの情報かよ」

「ん…… これは」

最後のページに目を通そうとすると

「あの、すみません」

不意に頭の上から声がした。

資料を見られないようにしつつ見上げる、

そこには頭に花をつけた女子中学生がいた。

腕にはジャッジメントの腕章がついている

「はい、なんででしょうか？」

無論ここに入るための正式な手続きなんて行ってない。

ここでトラブルを起こして身元がばれてしまつては復讐など不可
能。

ましてやジャッジメント相手にトラブルなんでもつての他だ。

なので出来るだけ好印象を受けるように丁寧に返す。

「今さつき連続強盗犯がここら辺を逃走していたらしいのです、赤い
帽子を被つた男なのですが、何か知っていたら教えて貰いたいの
です。」

無論、さつきまで資料しか見てない。

しかし「知りません」で返すのは

良くない。

それにこの都市について何も知らない。

一緒に探せば色々教えてもらえるだろう。

「特徴的な赤い帽子をかぶつた男なら見ました。

ずっと前ですが」

女子中学生 「そうですか、できれば案内してもらえませんか？」

「分かりました。」

そう言いつつ彼女は立ち上がる。

そして自分ならどう動くか考えつつ
適当に案内し出した。

そして30分間探すフリをしつついろんなことを聞いた。

その女子中学生は初春 飾利と言らしい。

そしてこちらへんの裏道、近道、店などを

教えてもらった。

肝心の御坂美琴については特にこれといったことは聞けなかった。

ただこれでもかなりの収穫だった。

そろそろ潮時かと思いつつ

あたりを見回すと

特徴的な赤い帽子の男。

一瞬だが見つけてしまった。

人混みに中そそくさと裏道に入って

いくのを。

ここで伝えると面倒なことになる

ここはスルーして……

初春さんは真面目に探してる。

その目は正義で溢れていた。

…… 仕方ない

情報料代わりだ

「すみません。」

今その男が裏道に入っていくのを見ました。」

初春 「本当ですか!!」

ありがとうございます。」

「あなたはここに……」

「いえ、ついていきます」

そっちの方が怖いフリして逃げ出せるからだ。

初春 「分かりました。でも危なくなったら逃げるんですよ!!」

「分かりました」

そう言いつつ裏道に入っていく裏道に入って3分ぐらい、男が仲間と金を分けているのを見つけた。

初春、腕章を男たちに見せつける

「ジャツジメントです」

「窃盗の容疑で拘束させて貰います」

男たち、初春達を睨みつける

「ああん、誰に向かっていいってんだ!!」

初春、ビビって震えている

「なあにビビってんだ。

まあでもジャツジメント捕まえておけば

交渉に使えるかもな。」

「お前ら捕まえろ。」

そう叫んだ瞬間、周りから男たちが出てきて

一斉に襲い掛かっってきた。

水無はスイツとこうげきを避けたが、

初春はもろに頭に喰らい壁に叩きつけられてしまった。

「初春さん!!」

とつさに叫んでしまった。

その瞬間自分が驚いてしまった。

しかし初春から返事はない。

どうやら気絶してしまっただけらしい。

自分だけなら逃げられるが、

いや、能力を使えば……

だめだバンクに載ってない能力を使ったら

確実に身元が調べられる。

そうしたら……でも

そうしないと初春さんが……。

まあいいか。

もうこの人の前に現れることはない
情報料分は支払った。

サヨナラだ

初春さん。

そう思い逃げ出そうとした時

「ジャツジメントですよ!!」

「今日の黒子は凄く切れてますの!!」

上を見ると建物の上に人影が見えた。

……… 黒子

その名前が水無の目に復讐を思い出させた

レールガン

御坂美琴の知り合い……!!

あの時、

白井黒子が駆けつけた時、

水無は突然太陽が見えて目を逸らした。

その瞬間目の前で着地音がした。

チカチカす目で前を見るとそこには

黒子が立っていた。

水無は驚いた白井がもといた場所からここまで3階ぐらいの高さ
がある。

この人の能力はなんだ？

と思いつつ

白井を見つめる。

白井は男達に近づくと、

1人の男が白井に襲いかかる

その男の攻撃を躲し白井は顔面に強烈なキックを入れる。

男はグワンと後ろに倒れた。

その男の顔は真っ赤になっており無残としか言いようがなかった。

その瞬間他の男も襲い掛かってきた。

その瞬間白井は消えた

いや、正確には男達の上空にテレポートしたのだ。

その手には何かを掴んでた。

テレポートか。こんな奴が同室か厄介だな。

水無はそう思いつつ見つめていると

不意に目の前にでかい青い物体が現れた。

水無は落ちる寸前でそれをキャッチした。

見るとそれは初春だった。

「初春を連れて逃げてくださいませ」

白井はそう言いつつ奥で戦っている。

勘弁してくれ

そう思いつつ表に出ようとする。

「逃すかよ。」

一人の男がナイフを投げてきた。

水無は避けようとする。

しかし初春を抱えてることなど

忘れていた。

水無はバランスを崩してしまった。

「くっ 痛あ」

水無は転んだ。

右脚が痛む

触ってみるとそこには硬いものが当たる。

手は赤く染まる。

おそろおそろ右脚を見てみると

ふくらはぎにナイフが刺さっている。

そこから血が溢れていた。

大丈夫まだ動……痛!!

水無は立とうとするが痛みで上手く立てない

男が水無を蹴り倒し初春を奪い取る。

「へへ、あばよ。」

そう言いつつ裏道に消えてった。

水無はこれを好都合と考えた。

こうなればアンチスキルはまず初春の搜索に動くだろう。

そうなれば自分の身元がバレる前に御坂御坂

に接触できる。

まあ、白井からはパンチ一発は貰うことになるかも。

仕方ないか。

そんなこと考えつつ倒れていると

白井黒子が戻ってきた。

「……初春は」

「……：……初春はどうしてのですかと

聞いているのですよ!!」

「……連れてかれた」

「……」

あつおこっているな

まあ当然か。

水無は覚悟を決めて目をつぶった。

不意に身体が浮いた。

何かと思って、

目を開けると白井が水無を移動させていた。

「なぜ、怒らない

この状況なら恨んでもおかしくない」

水無は言う。

すると白井は、

「なぜ、怒るのですか?」

と平然に答えた。

「あなたに任せたわたくしが

いけなかったのですし。」

「それに、あなたにそんな怪我おわせてしまったじゃないですか。」

そういうと水無の脚を石の上に置き
処置を始める。

「はやく初春さんを探したらどうです
今ならまだそんな遠くには行つて無いと
思いますよ。」

「まず一般市民の安全が第一ですの。

それに初春は覚悟はできてると思いますよ。」

そう言いながら処置を終わらせた白井は

「しばらくここで待っててくださいまし。」
と残して飛んだ。

脚を引きずりながら水無は

例の建物に向かう。

右脚は赤い液体が流れていた。

痛みで顔が歪む。

ただそんな中に笑みも憎しむも含んでいた。

そしてその手には白井黒子の手帳と

白井黒子の寮室の鍵

つまり御坂美琴の寮室の鍵が握られていた。

建物に戻つた水無はナイフを抜く。

さっきの処置のおかげかあまり出血は増大しなかった。

キャリーケースから処置キットを出し

包帯を巻く。

そんな中あの男の声が聞こえた。

「やあ 元気そうで何よりだ

しつかし君がlevel 10に傷を負わされるとは

僕の目は間違つていたのかね。

それに君も酷いものだ。

助けて貰つた相手から持ち物を盗むとは。」

水無、「……………」

「今回も無視か。」

まあいい今日も実験やってもらおうよ。」

今日も実験が始まる。

ただいつもと違うのは

水無が笑っていたことだ

次の日、水無は常盤台中学の寮前にいた

建物の影に荷物を隠し

中に入っていた。

「ウーーン

今日も疲れた。」

そう言いつつ寮室に入ろうとする。

ただ鍵がかかってない

あれ、今日は黒子はジャツジメントだし

掛け忘れたのかな？

そう思いつつ中に入る

そこには右脚に包帯を巻いた

女性がいた

その女性は

「やあ、はじめまして

レールガン」

と言った

第1章後編「復讐」

御坂、「あなたは誰なの？

てっいうかここにどうやって

入ってきたのよ。」

そう言われるや否や黒子の手帳を

見せつける。

「…………… あんた、黒子に…………… 何したのよ!!」

御坂は周りに電撃を散らす。

余程怒っているようだ

部屋のあちこちが焦げてきている。

「安心して、白井さんには何もしてない。なんなら電話でもしてみたら。」

「そんなわけ……く。」

自分の身より相手の身らしい。

携帯を取り出し、電話をかける。

…プルルルル

すぐに黒子は出た。

「もしもし、お姉さま」

「黒子!!良かった無事で。」

すると黒子

「……お姉さま、

やっぱりお知りなのですね。」

「? なんのこと?」

「初春の件ですよ……」

「初春さんがどうしたの?」

「……誘拐されました。」

二人の間に沈黙が走る。

「……どうして」

御坂が掠れた声で聞く。

「パトロール中に強盗犯に連れ去られたとしか……」

「そしてそこにいた黒と水色の服を着た

女性も消息不明です。」

御坂の顔が険しくなる。

「あとお姉さま申し訳ありません

寮の鍵を無くしました。」

その瞬間、御坂は水無を睨む。

「あんななんか知ってるでしょう。」

話さない!!」

水無は「その前にスピーカーモードにしてくれない。」

白井さんにお礼言いたいから。」

御坂は睨みつつスピーカーモードに切り替える。

「聞こえています。白井さん」

昨日はお世話になりました。」

「その声、昨日の。」

「初春さん、まだ見つかって無いようですね」

大丈夫です。私はあの男のたちに誘拐しろとは言ってません。」

「ただ、私が巻き込んでしまった感は

あります

申し訳ありません。

そしてお気の毒に、御坂さんとこれが

最後の会話になるとは、

さあ、最後に別れの挨拶を

したらどうです?」

白井、「えっどうことですかの

お姉さまに何かしたらゆる」

パン

寮内に低い銃声が響く。

水無が御坂の携帯を拳銃で撃ち抜いた

御坂の携帯は粉々に吹き飛ぶ。

水無、今度は拳銃を御坂に向ける。

「さあ、今度はお前の番だ。」

「死ね!!!」

水無はトリガーを引く、

御坂とつさに能力で横に避け。

電撃を水無に向け、放つ。

水無、避けるそぶりも見せず

そのまま受ける……

その電撃はあと一步のところまで横に逸らされた。

その周りには青く光る粒子が散っていた。

水無は連続して拳銃を撃つ。

御坂は左右に避け水無に接近する。

「電撃がダメなら素手よ」

そう言いつつ左ストレートを打つ。

「……無駄だよ」

水無はそう呟く。

御坂の左手もまたあと一步のところで

止まる。

その手の先には青い光が輝いていた。

水無はその手を掴むとそのまま壁に叩きつけた。

ドン

鈍い音が響く。

御坂は数回咳をし水無を見る。

その時、水無の身体全体が光っていた。

御坂とつさに電磁バリアを展開し窓から外に逃げる。

その瞬間、光は部屋全体に広がり

壁、床、天井が粉々に吹き飛んだ。

「うーま

またこれ買おう」

片手にエクレアを持ち常盤台中学の近くを歩く一人の女子中学生がいた。

制服は中学生だがその身長と体格からとても

中学生には見えない。

「あーん」最後の一口を食べようとした

瞬間、

ドゴーン

爆発音がしたと思った瞬間

彼女の身体は宙に浮き吹き飛ばされてしまった。

「うぐぐぐ」

「なんなんだったんだいまの」

彼女は運良くグリーンフェンスに突っ込んだらしい

傷は擦り傷だけだ。

だが、様々な破片が散乱し

周りには煙が立ち込めていてよく見えない。

しかしそんな中、電気を帯び、ところでどころ焦げた制服を着る常

盤台生が見えた。

彼女は走って近づきつつ

「御坂さん!!!」

そう彼女は叫んだ、その瞬間

常盤台生は振り返り

「佐天さん、来ちゃダメ!!!」

そう言い終わった瞬間

常盤台生は吹き飛ばされる。

「何よそ見してる」

煙の奥から黒いシャツを着た女性が

現れた。

「……なに、あの人」

佐天はそう思うしか出来なかった。

手元に硬い物があるのに気がつくまでは

御坂は体勢を立て直し地面に着地する。

「あんななんの目的で私を殺そうとしてるのよ。」

御坂は聞くと

「復讐だよ」

と声が返ってくる。

「復讐？ 私あんなに恨まれるようなことした

思い出なんか無いんだけど？」

そう言うと、

「ああ、そうだろうねお前は

そうは感じてないだろうね。」

むしろ正義だと感じている。」

「は、何よ、そんなこと思った事なんてn」

「絶対能力進化計画」

御坂は黙る

「あんだ… なぜ… それを」

「ウチの両親がその関連会社にいたと言ったら」

「勿論、あんたが破壊した施設の1つだったとすれば」

二人の間に沈黙が走る

そして

「あんたの親はクローンなんて

実験動物としか考えて無かったんだよ。

だからそんな研究に参加した

その実験を潰されてt」

御坂の左脚が大きく後ろに飛ばされる。

「いっ」

ターン

小銃の銃声が出た

御坂の左脚が赤く染まる

御坂は後ろに下がり

コインを構える。

「あんだあんなくそな研究のために

復讐するの

そんなの間違ってる。

あの子たちの思いを

思い知れ!!!」

そう言い放ちレールガンを撃つ。

パリン

何かが割れる音がする

そこには砕け散って舞っている水無のバリアと

水色のパーカーがあった

やった

御坂はそう思った
そう思えた

目に水無が映るまでは
御坂はそのまま地面にたたきつけられる
その衝撃で地面に亀裂が入る。

御坂は動けない
その上に水無がいる。
水無は拳銃を向ける。

「もういいよ」
「死ね」

ターーン

銃声が鳴り響く

「なんで、だよ」

御坂は目を開ける。

そこには脚を抱える。

水無の姿があった

とつさに電撃を放つ。

それは水無の体に

直撃し水無を気絶させた。

「何があったんだ」

御坂はそう思い身体を起こすと

そこには

拳銃を構える佐天さんの姿があった。

「次回予告になってない次回予告」

目が覚めると水無は病室のベッドの上にいる
能力が使えるか試したが

暴走しそうなほど不安定だったのでやめた。

水無は横を見る。

そこには

-googleをかけた御坂御坂がいた
とつさに身構えるが

その人が御坂では無いことに気付いた。

目に活発性が無い

ただ物事をそのままにしか

受け取れない目をしてる

「あなたがシスターズですか」

水無は言う

「はい、私がミサカ10032号です。

と、ミサカは自己紹介をします」

「で、なにを話せばいいんだい

姉さん」

次回 第二章前編「従姉妹」

次回作の流れは前触れもなく変更される
可能性があります

ご了承下さい

第二章前編 「従姉妹」

ここはある病院の一室。

そこには二人の常盤台生

カエル顔の医者

柵川生がいた。

「御坂さんは本当に治るのですか？」

柵川生が聞く。

「何を言ってるんだい。」

必ず治すと言ったじゃ無い。」

医者が答える。

「でも……」

誰でもそう思う。

常盤台生の左腕は運ばれた時

あらぬ方向に曲がっていたのだから。

他にも脚には弾と衝撃波によってえぐられて

いた。

「まあ、佐天さん。そう言ってるし信じましょう。」

ベットの上の常盤台生が答える。

「それよりも黒子。」

初春さんは見つきりそう？」

「現場の指紋から犯人が誰かはわかりましたが、まだ捕まえてませ

ん。」

「ですが、時間の問題でしょう。」

御坂はほっとした様で

「そっか。」

とベットに横になる。

「で、あの女性は誰かはわかったの？」

「あの人も指紋とDNAをかけたますが、

分かりません。」

「恐らく、侵入者だと思われれます。」

「それより、あの能力。」

計測だとlevelは3から4。」

「でもあの能力は5があってもおかしくない出力だった。」

御坂は不思議そうな顔で言う。

「その通り。計測値と合いません。」

「また、レベルアップ？」

「その線が怪しいですね。」

そこに佐天が割り込む

「それよりあの能力は何でしょうね？」

青い粒子があの人周りに出てましたが

何なのか分かります？」

そこに御坂は推測を話す

「おそらく、電子を能力で特殊な性質を

持たせたものだと思う。」

「電子ですか。」

「クローン力の応用なのかもしれない。」

「ただ分かっているのは

あの能力で物を高速で移動させれる。

そしてバリアを展開でき

それを使って爆発を起こせる

かな。」

「なかなか厄介じゃないのですの。」

「じゃ私はあの女性の様子を見て来ますの。」

起きてたら聞きたいことがありますので。」

ずっと黙ってた医者も

「じゃあ私も行くんかね。」

と言いつつ病室を出て行く。

「じゃあ私はこれで。」

柵川生も出て行く。

御坂は「じゃあね。」

と見送る。

「……ここは？」

水無が目を覚ます。

身体を動かそうとするが

上手く動かない。

特に脚は感覚すらない。

ここは病室の様だが

横にはアンチスキルがいる。

「んっ、起きたじゃん。」

あんた、4日も寝てたんじゃんよ。」

「4日……。」

「私がここにいるということは……

負けたんだな。」

はあーとため息を吐く。

「まあ、次殺せばいいや。」

と呟くと。

「その時は私たちアンチスキルが全力で

止めるじゃんよ。」

と言われた。

そこに白井黒子とカエル顔の医者が

やってきた。

「起きたようだね。」

と言いつつ機械の数値を見る

「うん、数値も問題ないようなんだね。

これなら話ができるんだね。」

「では私から。」

黒子が横まで寄ってくる。

「おひさしぶりです。」

といってもまずは自己紹介から

私、お姉さまとルームメイトの

白井黒子と申します。」

水無は少し間が空いたが

「……青星 水無です。」

と言った。

「では。せいsy……せい……せいしようs……

……水無さん。

あなたに聞きたいことがありますので答えていただきますの。

まずはなぜお姉さまを襲ったのですか？」

「復讐のため。」

ぶっきらぼうに答える。

「分かりました、次です。」

「どうやってここに？」

「黙秘権を行使します。」

「………そうなのです。」

「これが最後です。」

では失礼しますの。」

もう聞かないのですか。

聞きたいこと、沢山あるでしょうに。」

「……聞いて答えてくれますの？」

「……無理ですね」

「だからですの。では後日。」

そう言い出て行く。

「………で、あなたは何のようでここに？」

水無は医者に聞く。

「君の身体について話しておこうと

思っつてね。」

「君の細胞を調べさせて貰った。」

「驚いたよ。」

君、

御坂美琴と「従姉妹」だったんだかね
部屋に沈黙が走る。

そして水無が口を開き

「あなたすごいですよ。」

私の遺伝子からそこまでわかるとは。」

と水無は驚いた口ぶりで続ける。

「その通りです。」

私は御坂美琴のクローンであり

遺伝子改変を受けた人間です。

いや、人間かも怪しいかもしれませんがね。」

と言うや

「うん、問題ないようだね」

「では、僕はここで。」

「交代だから出て行くじゃん。」

と何もなかったかのよう

に二人が出て行く。

(何がしたかったんだ。)

水無は心の中でそう思った。

あの二人が出て行くや

水無は言う

「……………で、そこで隠れて聞いているあなた
出てきな。」

そう言うや

隣のベットのの下から

ゴーグルをかけた御坂御坂が出てきた

とつさに身構えるが

その人が御坂では無いことに気付いた。

目に活発性が無い

ただ物事をそのままにしか

受け取れない目をしてる

「あなたがシスターズですか」

水無は言うとう

「はい、私がミサカ10032号です。

と、ミサカは自己紹介をします」

「で、なにを話せばいいんだい

姉さん」

「ではまず、あなたの過去について。

とミサカは自らの希望を提案します。」

「……誰にも言わないで下さいね。」

「分かりました。とミサカは約束します。」

水無は口を開き話し出す

自分の過去

そしてなぜ復讐に走ったのかについて

第二章前編 「従姉妹」

第二章中編上 「偽りの親」

最初はベットのの中だった。なぜここにいたのかは分からない
ただ私は親が最後に運んでくれたと思っている

第二章中編上 「偽りの親」

その時日常生活に必要な知識は知っていた
それが一気に頭をよぎった

吐きそうだった

何の記憶もなくそれだけある

それは精神的にくるものがある

気をそらすため

まず私は記憶消失でこうなつたと考えた

でもすぐに違うとわかった

隣の机の上に手紙があった

書いてあつた事をざっくり言うと

君はクローンの失敗ロットで遺伝子改変

で直した身体だ

これを書いたのは君を貰い受けたものだ

あまり時間が無いので直接言えずにすまない

と書いてあつた

これだけかよと思うかもしれないが

実際に急いでたらしく

筆記類がそこに散らかっていた

それを読んで理解した私は

外の様子を見ようと出口を探した

数時間探してやっと見つけた

天井にあつた

ここは地下何だと初めて気づいた

そこから出ると外の日差しが眩しかった

けど私の視線はそつちには行かなかつた

目の前には爆風で無残にもバラバラと
なった死体

そして奥に怯えきった顔の死体があった
それぞれの死体の胸のポケットには
USBが入っていた

すぐに私は地下にあったパソコンに
繋ぐ

中からはそれぞれ二人の
メッセージ動画が入っていた

これは実際に見てもらった
方がよいと思うな

私の言葉じゃ伝えれない
話を戻すよ

この時私は負の感情と正の感情
両方とも知った

心臓が締め付けられるような気持ちに
自分はどうしようもなかった

そしてその気持ちは
復讐へと変わった

その日から復讐のためにあらゆる事を
調べた

そんな中で親が何をしていたか
そして御坂美琴の存在も知った

親はあの実験の研究者であったが
その内容はクローンの個別化だった

もし失敗に終わったら
大量のクローンが余る

そのクローンに個性を持たす事
そのために実験していた

破壊する必要はなかった

むしろ破壊してはいけなかった
なのに御坂美琴は破壊した
そのせいで親は責任を負わされ
学園都市を去ることになった
御坂美琴が親の生活を壊した
だから復讐したい
また脱線してしまった
で、親は失敗ロツトしかもらえなかった
ようだった
3体貫いその1体が私だ
2体の行方は分からない
あと親を殺したのは私の培養技術を
狙った集団だったという事
名前は分からない
調べて分かった事はこれぐらいね
そして私は旅に出た
もちろん復讐のために
その時に名前とあだ名をつけて貰った
あだ名は例の組織
名前は途中で知り合った旅人につけて貰った
その旅で能力が使えるようになった
理由はわからないが感情を多く
知っただからだと思う
それで今に至る

「ありがとうございます。」

とミサカは礼を言います。「」

「で、その組織はどうしたのですか？」

「とミサカは興味を持った事を聞いてみます。」
「壊滅させたよ。」

数人取り逃したが。
大体を刑務所もどきに送った」

「そうでしたか。と」

ミサカはもつと詳しくという言葉
を胸にしまいつつ返答します。」

「はは、また今度な

で、何でこんなに私の過去に
興味を持つん？」

「従姉妹だからですよ

とミサカはお姉さん顔を決めて言います。」
「……………」

(これも私が持たない感情なのかもしれない)
水無はそう思い外を見た

「ではこれで

これは話のお礼です。

とミサカはあなたに触れます。」

そう言つて水無の身体に電流を流す。

水無の身体が跳ねる。

水無は身構える。

すると手が自由に動いた。

脚は動かないが本を読んだりするには
十分だった。

どうやら上半身の麻痺を

取ってくれたようだった。

しつかり動くかどうか試して見る。

一通り動かしてからミサカに礼を言おうとする。

けど、ミサカはもういなかった。
今度お礼言おう
そう心に決めまた外を見た。

「よう、元気そうじゃなか。」

あのアンチスキルが入って来た。

「あなた、交代だったんじゃ……」

そう言いかけて理解した。

あのミサカと二人で話すため席を開けてくれたんだと。

「ありがとう。」

そういうと

アンチスキルは何も言わず少し笑った。

第二章中編下 「電荷粒子」

あれから十数日、脚の負傷で能力こそフルで使えないが、それ以外の動作は軒並みできるようになった。

そしてその後の聴取では能力について以外何も答えてない。これで完全に能力を使えるまで時間稼ぎの予定だ。

その後、例のアンチスキルに話し相手になって貰っている。

クローンゆえの感情の少なさのせいで会話を盛り上げられなかったが、

水無にとって人の経験談は

新たな感情を手に入れるチャンスでもあった。

それでいつか、水無は正の感情で

笑えるようになった。

笑っている時

これが続けばいいなとさえ思える時さえあった。

ただ現実はその思った瞬間

その時間を壊しにかかる。

第二章中編下 「電荷粒子」

今日はミサカと二人きりでの会話だ。

水無にとってミサカは姉として捉えてて大事な人になっていた。

内容は水無の能力について

ミ「そろそろ教えてくれないかと思えます。

と、ミサカは不満を述べます。」

水「白井にも話したし教えてあげるよ。

私の能力は

電子と陽子を操作して波の中にエネルギーの出し入れをする。簡単に言うと、

電子と陽子で周りのエネルギーを吸収し放出出来る。で大丈夫だと思うよ。

あと電子と陽子間で情報移動ができるかな。」

ミ「その能力なら量子コンピュータ作れますね。」

水「その通り。」

実際能力のパワーを上げるために使ってるね。

ただ、君のネットの演算の1%に満たないが。」

ミ「ただ、波なので

干渉される可能性があります。」

と、ミサカは不安になります。」

水「一定間隔で周波数変えてるから

大丈夫だと思うのだけど。」

最近、変に電波が干渉してるんだよね。

まあ、周波数かえとk……………」

フラグとは回収される物

今この瞬間理解した。

「……………あれ。アクセスできない。

なんでだ?」

そう言った瞬間、外で爆発音

その瞬間窓ガラスが吹き飛ぶ。

2人は布団を盾にする。

お互いに破片が刺さることはなかった。

ミ「なんなんでしょう?」

と、ミサカは恐ろしく速いフラグ回収に

驚きつつ

外の様子に不安になります。」

そんな中

例のアンチスキルが入ってくる。

「早く逃げるじゃん。」

変な組織が病院を囲っている。

もちろん狙いはあんたらじゃん。」

「屋上にヘリがあるじゃん。

今起動してる。

それに乗って逃げるじゃん。」

水「いこう。」

例のアンチスキルが水無とミサカを連れ

屋上に向かう。

脚が痛み、全速力で走れない。

ヘリポートの前の扉に着くと

そこには、

御坂と佐天、白井がいた。

水無を見つけるや

白井は鉄矢を抜くが、

それを御坂が止める。

御坂は脚は治っているが

腕は治って無いらしく動いてない。

「水無、今は協力して欲しい。」

と言われた。

本来なら断っていただろう。

しかし今は守りたい姉がいる。

水無は

「……………ごいよ。」

と言う事ができた。

その瞬間御坂は小さく笑った。

そのままドアを出て

輸送ヘリに乗る。

全人乗り

離陸出来るようになった。

その瞬間、弾が飛んできて、

操縦士を撃ち抜いた。

操縦士は腕を抱えて倒れる。

水無はとつさに白井の鉄矢を

抜き取り、能力を使ってスナイパーに向けて

打ち出す。

その鉄矢は当たりはしなかったが

撃退させる事は出来た。

その間に佐天さんが操縦桿を

握って離陸しようとしていた。

撃たれた操縦士が指示してる。

そしてヘリが宙に浮く。

そのままオートパイロットで飛行を開始した。

みんな、窓から外を監視する。

下では燃えるアンチスキルの車両。

襲撃犯の車両

さらには戦闘ロボットまでが確認できた。

実験で使われてた物だった。

その中に見た事ある格好の

女性がいた。

青い服に頭に花を付けた人。

初春さんだった。

しかしすぐに見えなくなってしまうた。

御坂と白井も気づいたらしいが

何も言わない。

佐天さんの気を使ったのだろう。

水無はそう思った。

そして目的地に着いた。

ヘリポートに着陸出来た時は
みんな、体の力が抜けてしまった。

ここは空港らしい

大きな滑走路がある。

看板には

婚后航空 と書いてあった。

5人はある建物に案内される。

「お待ちしてましたわ。」

御坂さんがた。」

そこにはまた、常盤台生がいた。

御坂が

「ありがとうございます。婚后さん。」

「いえいえ、友達からの

お願いですもの。

当たり前ですわ。」

ミサカと水無は状況が理解できなかった。

それが分かってか。

御坂が説明する。

「襲撃が来た時、婚后さんに

頼んでここに匿ってもらった事になったの。」

ざっくりだが明快であった。

二人とも理解できた。

「ではこちらに。」

と言われ案内された。

そこは空港のホテルであった。

「こちらに3部屋をご用意いたしました。

ではごゆっくり。」

部屋分けは

①白井、御坂

②ミサカ、水無

③佐天、例のアンチスキル

になった。

その後、御坂は全員集めた。
勿論初春さんについてだ。

「飛んでる途中、初春さんを見つけた。」

御坂がストレートに言う。

白井と水無は知ってるので
特に反応しない。

しかし佐天さんは食いついてきた。

「なんで言ってくれなかったのですか!!」

佐天さんは興奮して強い口調で言う。

「…………ごめん。あの時操縦中だったから
気をそらしてはいけないと思って…………」

そう言ってる中ミサカは

「で、なんか心当たりがあるのですね

水無さん、とミサカは問いただします。」

と水無に言う。

いつもは呼び捨てだが、

今はさん付けだ。

水無は淡々と話す。

「あの時、私の演算装置がアクセスできなくなった。

最初は妨害電波かと思ったが、

今、裏口と繋いでるが演算結果の中に

能力用と人格用が入っているのがわかっている。

つまりハッカーが奪って

誰かの人格をいじって

操っている。

そして、能力の種類も分かった。

サーマルハンド

っていう能力だが知ってるか？」

沈黙が走る。

「…… 初春の能力」

「ごめん。自分を過信していた。」

「反省会はそこまでじゃん。」

水無、今裏口から入ってるんだよな。

「だったらそこからアクセスできないのか？」

「出来るには出来るがした瞬間見つかって

締め出される。

彼女はプロなんですよ。勝てない。」

「しかしなんらかの手は打つ。」

「こっちも演算装置を組み直しているが

粒子の操作限界値が近くて

使い物にならない。

「やっぱりハッキングするしかない。」

「…… 初春。」

佐天さんが泣き出してしまった。

「これで一旦解散としましょうか。」

御坂の提案で各自部屋に戻った。

しばらくして②号室に婚后さんがやってきた。

「えつとすみません。」

水色の方お名前は？」

と聞かれ

「水無。青星 水無です。」

と答える。

言葉の抑揚がないが

数週間前と比べて大きく進歩した。

「水無さん。」

単刀直入に言います。

「ここでは機密保持のため十分な防衛ができません。

そこであなたに防衛の戦力に

なっていたいただきたいのです。」

水無は戸惑った。

自分はミサカは守りたい。

しかし御坂は守りたくない
殺したい。

そんな気持ちの中から出た答えは

「少し、時間をください。」
だった。

水無は例のアンチスキルに相談した。
復讐相手を守る事ができるかどうか。
しかしアンチスキルはこの一言しか
言わなかった。

「もし掴みたいものがあるなら
全力で掴め。後悔するな。」

あれから数日。

ミサカと白井は入ることを決めたそうだ。

水無は電話で婚后さん呼び出した。

水無は後悔しないようにするための
選択肢を選んだ。

「例の件。お願いします。」

と婚后さんに伝えた。

「ありがとうございます。」

じゃあ、早速こちらへ

お願いします。」

そう言われ、ある部屋に連れてかれた。

部屋には嚴重に鍵やセキュリティが
かかっていた。

婚后さんが鍵を開けて

中に入れてくれた。

そこには、白井とミサカ

そしてその背中には

物騒な大型兵装を背負ってた。
白井は鉄矢の装填装置。
ミサカは巨大な電磁投射砲を
持っていた。

「……………もしかして

私もあれみたいなの背負うのですか？」

水無は恐る恐る聞く。

「そっちの方が戦えますわよ。」

婚后さんは平然と答える。

小型兵器に慣れた水無にとって

どうしても大型兵装は違和感があった。

しかし水無は防衛戦での大型兵装の

有用性は理解しているたので

反論できなかった。

「では早速あなたの分をつくりますわよ。

あなたの能力教えてくださいな。」

と言われて

水無は渋々答えた。

自分の能力使用に制限が

かかっていることも。

答え終わると、婚后さんは驚いた顔になっていた。

「そんな能力、聞いたことありませんね。

自分の能力で自分のlevelを上げる。

そんなことできるんですね。」

「それはともかく早くあなたの分つくりますわよ。」

そう言われ、水無は奥に入っていた。

あれから6時間ぶつ通しで作ってもらった。

「できましたわよ。水無さん。」

そう言われ、確認しに行く水無。

そこには、1mぐらいの3枚の整流板がついた荷電粒子砲が

2つあった。

「これをつけてください。」

とスタツフから円型の大型タンクと2つのアームの付いた金属製のリュックみたいなのを渡される

水無はそれを背負いながら聞く。

「これにこの兵器がくつつくのですか？」

「その通りです。では早速。」

と言われ、背中のアームに

荷電粒子砲がくつつく。

意外と軽い。

そう思っていると

—4型能力者補助兵装の接続を確認しました—

と脳内に聞こえてきた。

水無は驚き転倒しかける。

スタツフが

「今のは指向性音声です。」

あなたにしか聞こえないです。」

「では早速テストといきましょうか。」

まず、腰のあたりに手をかざしてください。」

と言われ、手をかざす。

すると後ろの荷電粒子砲が動き

腕に噛ませてくつつく。

腕を動かすと荷電粒子砲は難なく動く。

「問題ないようだね。」

あともう一回かざすと戻るから。」

と言った時、

サイレンが鳴り出した。

この音は侵入者の時の音だと

教えてもらっていた。

「このまま行きます。」

そういうと説明書を取った。

「まだテストが……」

「信じてますよ。あなた方の技術力。」

水無はそう言い残し

部屋を出て行く。

途中、ミサカと白井と合流した。

「それ、テスト終わってますの？」

と聞かれ

「まだだね。」と返す。

「でも、守りたい物を守りたいから。」

と言うと白井は笑う。

「では、あなたの守りたい物、

しっかり見させていただきますの。」

と言って

それぞれ担当場所を決めテレポートで現場に飛ぶ。

そこでは警備隊が

例の戦闘ロボット達と戦っていたが壊滅寸前だった。

「くそ、こちらはライフルしかないのに

ロボットとどう戦えと。」

「口を動かす前に手をうごかせ。」

「すぐに援軍が来るらしい。」

それまで耐えるんだ。」

一人の警備員が転倒しロボットが

それを踏みつけようとした。

「やめろ。やめてくれ。」

その瞬間、青い光線がロボットに当たる。

その瞬間ロボットの脚が消え去った。

それを見た警備員は振り返る。

そこには煙の中

荷電粒子砲を構える

水無の姿があつた。

「下がって!!」

水無が叫ぶ。

すると警備員はそのまま建物に隠れる。

やはりロボットは実験のと

同じ物だった。

しかし今はバリアは貫通されてしまう。

被弾はできない。

ロボットから声が聞こえる。

「君が第三捕獲目標だね。」

できればそのまま捕まってくれないかな?」

水無は

「無理です。」

と答える。

「だよね。なら実力行使するまでだ!!」

と言い

突っ込んでくる。

水無は荷電粒子砲のセレクターをP

に入れる。

そしてトリガーを引く

今度は小さな光源が発射された。

ロボットは避ける。

その光源が横を通過した瞬間。

大きく膨張してプラズマ空間を

作り出しロボットを飲み込んだ。

ロボットは制御を失い

そのまま奥に突っ込んでいった。

「だったらこれならどうだ。」

と言うと他のロボットが一斉に射撃する。

水無は荷電粒子砲を後ろに回し

整流板を展開する。
すると荷電粒子砲はブースターのようになり、高速移動を始めた。
左右に避けつつ、接近する。
やがて射程に捉えるとセレクターをBに入れて1体ずつ確実にビームで破壊して行く。
最後に有人機と思われるロボットが残った
そいつは破れかぶれに突っ込んできた。
水無は片方だけ後ろに回し
そしてブースターを吹かせ
接近する。
そして互いにぶつかった。

水無は荷電粒子砲本体で直接ロボットの操縦室前面を刺し破壊した。
た。

操縦室の前面は弾け飛び原型を留めてなかった。

水無は壊れたロボットから操縦士を引きずり出す。

中の操縦士は気絶していた。

そんな中、音声が聞こえる。

—こちら 白井 侵入者撃破—

—こちら ミサカ 侵入者を撃破しました—

それを聞き水無は

返事をした。

—こちら 水無 侵入者を撃破—
と

そんな中、刺した荷電粒子砲から煙が出ている事に気がついた。

(どうしよう)

刺せそうだから刺したけど

違ったのかな)

心の中に不安になっていた。

そして説明書の注意をしっかりと読む事を学んだ。

第二章後編 「復讐」

すみませんでした

水無が頭を下げている。

勿論壊した兵装についてだ。

あの衝撃で先端は全損

おまけにコアも壊れてしまったらしい。

流石にこれにはスタツフも

苦笑이었다。

「まあ、生きて帰って来てくれて

良かったよ。

最初でここまで壊したのは君が初めてだが。

改良しとくから今は休んできな。」

と言われ萎んで部屋に戻った。

部屋にはベットで寝るミサカがいた。

あちらも戦闘に出たため疲れたのだろう。

水無は起こさないように入り

新しく貰った着替えを試着する。

相手はどこでサイズを知ったのか

びっぴりだった。

前の服と所々違うが

ほとんど一緒の物を揃えて貰った。

しかし腰に巻いていたパーカーは無く。

代わりにウインドブレーカーが

あった。

水無はそれは腰に巻かずそのまま着た。

今までツインだった髪は下ろして

ストレートにした。

試着を終えて水無もベットに入る。

匿ってくれるため
場所バレしにくい

通常部屋を取ってくれたが
それ故にベットが1つしかなかった。
なのでくつついて寝ることになる。

これはここ数日そうなのだが、

水無は早く寝てしまい

ミサカは早く起きるので、

一緒に寝てる感じがしなかったのだ。

水無は不安であったが楽しみでもあった。

名付け人から

人は一緒に寝るといい夢が見れる

と言われたことがあったからだ。

水無は布団に潜り、ミサカと背中合わせになる。

その背中は暖かく気持ちのいい物だった。

「こうでもなければな……………」

そう独り言を言うと、

「………… お姉様……………」

と、ミサカの寝言が聞こえた。

水無は、

姉さんにとって御坂美琴は大事な人なんだろうな。

と思うとすぐに寝てしまった。

次の日、兵装のテストのために
例の部屋に向かう。

スタツフに開けてもらい入ると

白井と御坂がいた。

「もう、腕は動くの？」

水無は、強い口調で聞く。

「バッチリ。」

と御坂は返す。

またしても白井は構える。

「これが終わりまで

殺したりはしない。」

とぶつきらぼうに言い水無は

奥に行った。

電荷粒子砲は綺麗に直されていた。

「追加の機能を話すわ。

まず、お望み通り刺せるようになったわ。

あと、整流板で斬ったりバリア展開出来るから

上手く活用してね。」

水無は装備して、

実験場に向かう。

そこで一通りテストして終了。

何事もなく使えた。

部屋に戻ると、

御坂が大型兵装を背負っていた。

大型のレールガンが二つ腕の横にくっついていた。

「御坂も戦うの?」

と水無は聞く。

「彼らの一番の目的は私よ。

そんな状況で何もしないわけには

行かないわ。」

「じゃあ。死ぬなよ。」

お前を殺すのは私だ。

水無は佐天さんの部屋に行く。

ノックして部屋に入るとそこには

例のアンチスキルしかいなかった。

「すみません。佐天さんは?」

「さつき、出て行ったじゃん。」

「どこに行ったのですか？」

「さあ、ターミナル内じゃない？」

「ありがとうございます。」

と言い自分の部屋に戻る。

「姉さん、一式貸して。」

と入るや叫ぶ。

「どうぞ。とミサカh」

「ありがとうございます。」

と奪い取りシャワー室に入る。

「まったく騒がしい従姉妹ですね。」

と、ミサカは呆れます。」

水無がミサカから奪い取った物は

外出用の変装服と髪染めだった。

水無は白い髪を黒く染め後ろで縛る。

旅行者らしい服装になり

そのままターミナルに向かう。

ターミナルは人であふれていた。

そんな中で佐天さんを探すのは

気が遠くなる作業だった。

30分後

空港内のある店先で服を

眺めてる佐天さんを見つけた。

あつちも変装してるが、

髪がそのままバレバレだ。

横から近づき呼びかける。

「すみません。」

「はい。」

そう言って振り向いた。

水無は手早く帽子を取って

「水無です。話があります。」

と言い帽子をかぶる。

佐天さんも気づいたようで

「分かりました。」

と言つてついて来た。

近くのカフェで二人はいた。

「しっかりと話しようと思つて。」

「初春さんの件

本当にごめんなさい。」

「でも、初春は取り返してくれるんですよね。なら」

「難しいといいざるを得ない。」

「えっ……………」

「どうして……………」

「演算装置に人格を委ねてるということとは

演算装置自体が脳みたいなものなんだが

脳に介入されたり、脳が破壊されたら

どうなる?…」

「……………」

「今のところの解決法じゃ

どっちにしろ元の初春さんに戻せない。」

「……………もう、だめなんで

すか?…」

佐天さんはすでに涙目だ。

「演算装置の自壊コードを

入れれば、良いんだけど。

妨害でエラーを起こすと接続者全員

廃人になるから……………」

これも非現実的だ。」

「うっ え」

遂に本泣きになってしまった。

水無はどうすればいいのか
戸惑っている。

「あらあら、知り合いを泣かせとい
何もできないとは情けないゾ。」
と、後ろから声をかけられたと
思ったら。

金髪の女性がそこに立っていた。
「ちよつとうるさいから黙って
もらうよ。」

と、リモコンのボタンを押す。
ピッ

と音がすると佐天さんはピタッ
と泣き止んだ。

そして、金髪の女性の顔も険しくなる。

「まさかこんなところで会えるわね。
あなた、失敗個体ね。」

水無は驚き、焦る。

この人は襲撃犯のメンバーかもしれ
ない。
自分だけでは佐天さんを連れて

逃げる事はできない。

更にこんな所で戦闘したら負けるのは目に見えている。
そんなことを考えてると。

「私は襲撃犯じゃないわー。」

「信じれるわけないでしょ。」

水無はそう言い返すと。

「みさきちゃん。」

と金髪の女性に抱きつく人がいた。
その人はミサカに似た雰囲気
を持っていた。

水無は実験でもらった資料を思い出す。
さっきの能力、みさきと言う名前。

「あなたが食蜂操祈ね。」

「ご名答。」

と食蜂は言う。

水無はほっとし背もたれに寄りかかる。

心理掌握の能力者か。

ん……………。

水無は何かを思いつき、

食蜂に話しかける。

「少し話を聞いてくれませんか？」

と水無は頼む。

「私も貴方に興味あるから。」

貴方について教えてくれるならいいわよ。」

その後、場所をvip用の部屋に移動して

話をした。

勿論能力で借りた。

途中、警策看取と言う人とも

合流した。

もう一人はドリーと言うらしい

5人と中々大勢になってしまった。

そして一通り話す。

「ふーん。情報通りね。」

食蜂が呟く。

リモコンを押す。

佐天さんに聞かれてまずい所は

消去したらしい。

「で、願って、何かしら。」

「初春さんの奪還を手伝ってほしい。」

「具体的には？」

「初春さんの心理に介入して私が演算装置に

自壊コードを入れる時間を稼いで欲しい。」

「ふーん。まあいいわよ。」

「ありがとう。」

「その代わり、あの子を頼むわよ。」

「頼まれなくても。」

「じゃあいつになるか分からないから。」

部屋取つとくね。」

と水無と言い出て行く。

佐天さんの顔は幾分か良くなっていた。

「では、あとで連絡入れます。」

と言つて佐天さんも出て行く。

「御坂さんを殺そうとした能力者

それが従姉妹とは

なんとも現実は何が起きるかわからないわね。」

その後

食蜂 警策 ドリーが

4つ目の部屋に入った。

最初は他の人の反応は決して

良い物ではなかった。

しかし、水無がなんとか説明して

受け入れてもらうことが出来た。

そして3日後、その時が来た。

例の襲撃犯が白昼堂々やってきた。

今回は相手も本気でロボットだけで無く

能力者まで投入している。

勿論、初春さんもだ。

9人はそれぞれ準備する。

そして互いに対峙する。

正面を張るのは大型兵装の4人。

すると、襲撃犯から例の男の声が聞こえてきた。

「はは、水無。実験来ないと思ったら、

そつちに着くなんて。」

復讐はやめたんかい。」

「……………」

「また沈黙か。でも今回の実験は

君がメインじゃない。

君が復讐したい人

私も復讐したいのでね!!」

そう言つて、奥からパワードスーツを

着たおばさんが出てくる。

それを見た御坂と白井、佐天は驚く。

そして、

「あなたが主犯だったのですわね。

テレスティーナⅡ木原Ⅱライフライン

「御坂美琴、あんたをぶつ殺す。」

テレスティーナがそう叫ぶと。

「そうは、させません。」

と白井達が返す。

そして互いに踏み出す。

第二章後編 「復讐」

第三章前編 「真実」

崩れる様に座る一人の
女性がいた。

水無である。

その前には

テレスティーナⅡ木原Ⅱライフライン

そして

水無の目には涙が流れ

絶望した顔になっていた。

第三章前編 「真実」

最初に飛び出したのは水無と白井。

白井が能力者、水無がロボットの相手をする。

相手も能力や銃弾で対抗してくる。

その後ろで御坂とミサカが支援をする。

数日前

4人集まって作戦が立てられていた。

まず水無とミサカでロボットを削る。

その間、能力者は白井と御坂で足止め。

ここまで終わったら。

その後合流して能力者を叩く。

その通りに水無は

一体ずつ破壊していく。

前と同じタイプで余裕で破壊できる。

ミサカも電磁投射砲で奥のロボットを砲撃していく。

弾は76mmプラズマ弾

奥の集団はもれなく行動不能になる。

それに気付いてか、相手はロボットを分散させた。

しかしそれは連射ができない

荷電粒子砲を使う水無には好都合だ。
そして60体ほど破壊した頃、
粒子のチャージのため刺して
攻撃していた水無を無視して
3体が奥のミサカに突っ込んでいく。
ミサカがとつさに2体破壊するが、
残り1体が射撃する
それは当たりはしなかったが
45mmの威力は伊達ではない。
ミサカは衝撃で吹き飛ばされる。
そのまま10mほど飛び地面に激突する。

「ミサカ!!」

水無は叫ぶ。

「大丈夫です。」

と返事があるが装備が重くて
すぐに立てないらしい。

水無は全力で助けようと飛ぶが

その時には、もう銃口が向いていた。

そして、

ドンッ

と弾が当たる音がする。

しかし相手のロボットは撃ってない。

それどころか胴体に大穴が空いていた。

ミサカが振り返ると、同じロボットが

大型砲を構えていた。

そこから声が聞こえる。

「いや〜間一髪でした。」

「佐天さん。」

水無が嬉しそうな声で返す。

これは前の襲撃で残った残骸から直した
物だ。

それに弄ってありいろんな武装が使えるようになってい
る。水無はミサカを抱き上げる。

そして

「あとをお願いします。」

といい御坂達の方に加勢しに行く。

「さあ、今日は暴れるぞー」

といい佐天さんは集団に突っ込んで行く。

御坂達はだいぶ苦戦していた。

相手は全員

水無の演算装置に操られ

能力を上げられていた。

そこら辺から集めた様でどれもレベルは3から4だが、

20人はいる。

おまけに

テレステイナーⅡ木原Ⅱライフライン

までいる。

いくら、能力のレベルに差があろうが

連携が取れようが、

武器のアドバンテージがあろうが

物量には勝てない。

白井も御坂も数人気絶させるが、

依然不利で時間稼ぎは限界であった。

ついに白井が転倒してしまう。

御坂がカバーに入るが

いかにもそれを見越してか

御坂を重力操作で捉える。

動けなくなつたところをテレステイナー

が殺そうとした。

その瞬間に重力操作の能力者に

ミサカが撃ったゴム弾が直撃。

能力が切れ動ける様になった御坂は素早く回避して避けた。

「お前らよくもー!!」

怒鳴るテレスティーナ

そんなことお構いなしに

4人は攻撃する。

白井が大量の鉄矢で相手を追い込みそこを御坂が仕留めることで確実に数を減らす。

ミサカと水無は他の能力者を

引き付けることで白井と御坂がより動きやすくした。

そしてついに

相手を4人まで減らすことができた。

でもそんな時、水無の荷電粒子砲の

一つに被弾し爆発。

そのまま吹き飛ばされてしまった。

ミサカが助けに行こうとするが

初春に邪魔されてしまう。

「いったー」

なんとか立ち上がろうとする

水無の首をテレスティーナは

掴み持ち上げる。

「うぐ　げほっ」

苦しむ水無の顔を楽しそうに見ながら話し出す。

「あんだ、本当にバカだよな。」

人の策略に見事に引っかかるとは。」

「どう　いう　意味　だよ。」

「あんた、何も違和感感じなかったのか
なんでお前が親だと思つた死体に
きれいにUSBが残つてんだ。
なんで、あのパソコンにあんなに
詳しく情報が入つてたんだ。」
「私の作り話だったからだよ!!」
その瞬間水無の目には驚きが走つた。
「お前が御坂を襲うように作つた
茶番だよ。」

「じゃあ あの したい は
わたしが お そつた そしき
は」

「全部茶番のために作つた物さ」

「お前に親はいないし

あの組織が襲つたりしてません。」

「勿論、御坂は何も関わってません。」

「わたし は 意味 なく

ひと を おそ ていた

ふく しゅう は

むい み だった」

水無の目が絶望で染まっていく。

涙も流れていく。

「いやいや、お前ははわたしのために
行動してくれた。

感謝してるよ。」

復讐者さん

「あつ あつ

あああああああああああ———」

水無は狂つた様に叫ぶ。

そして、すぐに動かなくなる。

テレスティーナは手を離し落とす。

ドサツ

水無は動かない。

その目は絶望しか映ってなかった。

(ああっ 私は何をしてきたのだろう。

はは もうどうでも良いや)

そう呟くと

—そんなのどうでも良いわけないじゃないですか!!!—

無線から佐天さんの叫び声が聞こえてきた。